

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 15 日現在

機関番号：10104

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2016

課題番号：26770115

研究課題名(和文)18世紀から現在にいたるBildungsroman概念の展開に関する文献学的研究

研究課題名(英文)Eine philologische Arbeit zur Erlaeuterung der Entwicklung vom Begriff Bildungsroman vom 18. Jahrhundert bis zur Gegenwart

研究代表者

北原 寛子(Kitahara, Hiroko)

小樽商科大学・言語センター・客員研究員

研究者番号：60382016

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,800,000円

研究成果の概要(和文)：従来一般にビルドゥンクスロマンBildungsroman(=「教養小説」)は、18世紀後半の若者によって自己の内面と社会の現実の葛藤を小説へと昇華させたジャンルと説明されていた。しかしこれはディルタイがヘーゲル美学を解釈して作り出したイメージであり、文学史的事実と合致しない。ヘーゲル美学における小説理論は18世紀の議論を継承しているが、それはバロックに始まりロマン派で終わる100年の大きな変化を反映している。ディルタイはヘーゲルを経由して伝承されてきた18世紀以来の小説理論をBildungsromanと命名したのである。

研究成果の概要(英文)：In diesem Forschungsprojekt ist der Begriff "Bildungsroman" zu ueberpruefen. Das allgemeine Verstaendnis fuer "Bildungsroman" heute, dass diese Gattung aus dem Inneren des jungen Dichters, der unter der Diskrepanz zwischen seinem hohen Ideal und der platten Realitaet leidet, entstanden ist, passt nicht den historischen Tatsachen. Die gebrauchliche Meinung um "Bildungsroman" beruht auf dem Text Diltheys, der von Hegels Aesthetik abhaengig ist. Hegel hatte in seinem Werk um Kunst die Romandebatte seit 18. Jahrhundert akzeptiert und resuemmiert, und sein Nachfolger Dilthey hat sie "Bildungsroman" genannt, womit sie keine umfaengreiche Romantheorie mehr ist, sondern sich in eine Abteilung des Roman veraendert hat.

研究分野：ドイツ文学

 キーワード：教養小説 ビルドゥンクスロマン Bildungsroman ヴィルヘルム・マイスターの修業時代 ゲーテ デ  
 イルタイ

## 1. 研究開始当初の背景

Bildungsroman 概念(いわゆる「教養小説」ビルドゥンクスロマン)は、理想と現実の間で葛藤する若い主人公の成長を描いたゲーテ時代以来の伝統的な小説のタイプであるとされ、ドイツ文学の根幹をなすと理解されていた。しかしこの概念については、2つの大きな問題があった。

第一の問題は、「ゲーテ時代」に限定するべきか、いつの時代までを含むのか、なぜ「ゲーテ時代」以前は含まないのか、という時間的制約に関わることである。この問題は、小説を文学史的に評価する際に大きな問題を引き起こしていた。なぜ「ゲーテ時代」が小説の歴史を振り返る際に基準とされるのか、明白で説得力のある根拠はどこにも示されていない。それにもかかわらず、「ゲーテ時代」以前のドイツには、評価に値する小説作品がなく、近代小説はゲーテの『ヴィルヘルム・マイスターの修業時代』という Bildungsroman をもって始まるという意見が多数を占めていた。

第二の問題は、主人公の成長(人格の完成)という尺度で、このジャンルの始原とされる『ヴィルヘルム・マイスターの修業時代』を解釈した際に、作品の多様性・豊饒性が捨象され、作品の本質が損なわれてしまうことである。その他の作品についても、本質的な理解を遠ざける可能性があった。Bildungsroman 概念について従来の共通見解は、文学史を歪めていただけでなく、個別の作品についての解釈を平板化してしまっていた。

しかしこれらの課題についての積極的な解決がなされないまま、使用が続けられていた。その理由は、Bildungsroman で意図される小説像が高い精神性に満ちていると考えられ、概念の矛盾を考察することは、その崇高さを冒すのではないかという配慮があったためと考えられる。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、Bildungsroman 概念の起源を解き明かし、これが引き起こしてきた文学史と作品解釈に関わる上記2つの問題について考察することである。

さらに、この概念が高い精神性と結びつけられた過程について分析し、現在の共通見解の批判的な見直しをこころみだ。なぜならば、Bildungsroman 概念は文学史の概念を超えて、ドイツ近代の精神文化史において重要な役割を果たしてきたからである。この概念について、歴史的な経緯を歪めてでも重視すべきイデオロギーがあったと仮定でき、この隠された文化的な背景を明らかにすることをめざした。

## 3. 研究の方法

従来は、Bildungsroman は作品のジャンルと考えられ、これに含まれるとされる諸作品を年代別に考察することでその歴史的経緯が明らかになると考えられていた。

本研究の独自な点は、Bildungsroman は作品のジャンルではなく文学史を包括する概念であり、文化的イデオロギーの一種と把握の方法を転換したことである。なぜ「ゲーテ時代」以前のドイツの近代小説が否定的な評価を受けてきたのかを探るべく、18世紀初頭以来の小説理論を中心に分析をおこなった。

## 4. 研究成果

上記研究によって至った結論は、次のとおりである。

まず、Bildungsroman 概念が「ゲーテ時代」と結びつけられた理由は、20世紀の研究者たちがこの概念について論じる際に、ディルタイの『シュライヤーマッヒャーの生涯』と『体験と詩』におけるあいまいな記述を繰り返し参照し、定義の根拠としたためである。あたかもディルタイの記述通りの事実があったかのように受容され、ディルタイのテキストが批判的な分析の対象とされてこなかったことで、多くの誤解と偏見が生まれたのであった。

ディルタイは Bildungsroman にかかわる記述を、ヘーゲルの『美学講義』に依拠している。ヘーゲルは小説を「市民的叙事詩」と定義しているのだが、ディルタイをはじめとした19世紀の詩人や思想家たちは、この見方を、市民層の作者・読者に理想の自我を投影する場としての小説というイメージに変換して受け取り、理想の市民像を提示するための領域として活用した〔北原寛子「当世風騎士道小説として読む近代小説 ―フライターク『貸しと借り』における「市民」の表象―、小樽商科大学『人文研究』第131輯(2016)、83-101頁〕

ディルタイの Bildungsroman に関する記述は、理想の市民像を模索する19世紀後半以降の青年たちに受け入れられた。20世紀の思想家ルカーチは、若き日の著作『小説の理論』において、ディルタイの記述に依拠した Bildungsroman 観を展開している。ルカーチがディルタイを読んだ時点で、ディルタイが18世紀にあったと主張した「理想を求めて現実の社会で葛藤する若者」は少なくとも近代小説誕生の母体ではなかった。しかしルカーチ自身がハンガリーにおける社会主義革命やその後の亡命生活を通じてこの人生経路を体現することで、時代的には前後するが、ディルタイのテキストを有効にしたのである〔北原寛子「自伝として読むルカーチ『小説の理論』、北海道大学ドイツ語・文学研究会『独語独文研究年報』43巻(2016)、1-15〕

頁」。

このように、現在の Bildungsroman 概念はヘーゲルの『美学講義』まで起源をたどることができるが、このテキストはさらに 17 世紀末から 18 世紀全体を通じた小説理論の発展を踏まえている。そのため本研究では、18 世紀の小説理論の変化を分析し、主人公の成長に注目することや、人物の内面描写を重視するなど、Bildungsroman の根幹をなす要素がなぜドイツの小説理論で論じられるようになったのかを検討した。

研究により得られた結論は次のようなものである。18 世紀初頭のバロックから啓蒙主義への移り変わりの時期に、道徳と合理性の観点から奇想天外な筋が批判されるようになった [北原寛子「ゴットハルト・ハイデガーの小説批判 —17 世紀末の小説論争についての一考察—」、小樽商科大学『人文研究』第 133 輯 (2017)、59-77 頁]。小説にはみだらなモチーフが取り上げられ、道徳的に問題があるだけでなく、虚構を描き出すという点で実体がなく無意味であるという批判が展開された。

さまざま小説擁護論が登場したが、そのなかでもヨハン・カール・ヴェーツェルによる小説『ヘルマンとウルリーケ』は、前書きに「市民的叙事詩としての小説」という言葉を含み、後にヘーゲルへと至る「市民を描くジャンルとしての小説」のイメージを作り出す原動力となっている [北原寛子「「市民的叙事詩」としての小説 —近代小説理論の展開から読む J. K. ヴェーツェル『ヘルマンとウルリーケ』—」、阪神独文学会『ドイツ文学論攷』56 号 (2015)、005-027 頁]。主人公の成長に注目することは、詩人の内面吐露に中心的に依存するものではない。そうではなく、小説が不合理で不自然な娯楽に過ぎないという批判に対抗するために、小説擁護派によって繰り返し主張され、ヴェーツェル『ヘルマンとウルリーケ』のような作品で実践されたプログラムなのである。後の Bildungsroman の特徴は、著作の刊行とその批評を中心に形成されており、きわめて集団的・文化的な作業によって形成されたといえる。

さらに、ヨハン・アドルフ・シュレーゲルは、散文の芸術的価値に注目して小説の発展に貢献している。18 世紀の終わりまで、散文は実用の言語とみなされ、詩的言語である韻文に劣ると考えられていた。しかし、J. A. シュレーゲルは、言葉そのものに最初から響きの美しさがあると主張し [北原寛子「18 世紀における韻文・散文論争 —J. A. シュレーゲルによるバトー『芸術基本原則制約論』ドイツ語訳を手がかりに—」、小樽商科大学『人文研究』第 129 輯 (2015)、111-133 頁]。小説が言語面から文学たり得ないという批判に対抗している。

その息子フリードリヒ・シュレーゲルも小説を「普遍的類型」と呼び、総合的な芸術的

形式ととらえることで、小説が文学ジャンルの中で地位を高めることに理論面から貢献している [北原寛子「普遍的類型として的小説理論? —Fr. シュレーゲルの小説理論における小説反対論の影響について—」、小樽商科大学言語センター『言語センター広報 Language Studies』第 23 号 (2015)、9-18 頁]。

このように、小説は 18 世紀を通じて、道徳的・芸術的に劣った娯楽という位置づけから、精神的・文化的な活動の中心へと移り変わったのであった。

以上 8 本の研究論文と、研究代表者がこのプロジェクト以前に挙げたゴットシェートやブランケンブルクの小説理論に関わる研究成果と合わせて、著作の刊行に向けた作業が現在行われている。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 8 件)

北原寛子「ゴットハルト・ハイデガーの小説批判 —17 世紀末の小説論争についての一考察—」、小樽商科大学『人文研究』第 133 輯 (2017)、59-77 頁、査読無。

北原寛子「20 世紀におけるビルドゥンクスロマン概念の共通見解形成過程とその問題について」、小樽商科大学『人文研究』第 132 輯 (2016)、155-177 頁、査読無。

北原寛子「自伝として読むルカーチ『小説の理論』」、北海道大学ドイツ語・文学研究会『独語独文研究年報』43 巻 (2016)、1-15 頁、査読有。

北原寛子「当世風騎士道小説として読む近代小説 —フライターク『貸しと借り』における「市民」の表象—」、小樽商科大学『人文研究』第 131 輯 (2016)、83-101 頁、査読無。

北原寛子「ディルタイのヘーゲル小説理論受容 —19 世紀における Bildungsroman 概念展開についての一考察—」、小樽商科大学『人文研究』第 130 輯 (2015)、139-158 頁、査読無。

北原寛子「普遍的類型として的小説理論? —Fr. シュレーゲルの小説理論における小説反対論の影響について—」、小樽商科大学言語センター『言語センター広報 Language Studies』第 23 号 (2015)、9-18 頁、査読無。

北原寛子「「市民的叙事詩」としての小説 —近代小説理論の展開から読む J. K. ヴェーツェル『ヘルマンとウルリーケ』—」、阪神独

文学会『ドイツ文学論攷』56号(2015)  
005-027頁、査読有。

北原寛子「18世紀における韻文・散文論争—J. A. シュレーゲルによるパト—『芸術基本原則制約論』ドイツ語訳を手がかりに—」小樽商科大学『人文研究』第129輯(2015)  
111-133頁、査読無。

〔学会発表〕(計 5 件)

北原寛子「継承か歪曲か? —ディルタイによる18世紀小説像の理想化について—」日本独文学会2015年秋季研究発表会、於鹿児島大学、2015年10月3日。

北原寛子「小説はいかにして「市民的叙事詩」になったか? —モルゲンシュテルンを中心に—」北海道ドイツ文学会第79回研究発表会、於小樽商科大学、2015年7月18日。

北原寛子「18世紀ドイツ小説理論におけるフランスからの影響について —J. A. シュレーゲルによるパト—『劇術基本原則制約論』を手がかりに—」北海道ドイツ文学会第78回研究発表会、於北海道大学、2014年12月13日。

北原寛子「普遍的類型としての小説理論? —Fr. シュレーゲルの小説理論における小説反対論の影響について—」日本独文学会2014年秋季研究発表会、於京都府立大学、2014年10月12日。

北原寛子「18世紀ドイツにおけるキリスト教の小説批判」日本ヘルダー学会春季研究発表会、於立教大学、2014年7月6日。

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

○出願状況(計 0 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

○取得状況(計 0 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：

番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕  
ホームページ等 なし

6. 研究組織  
(1)研究代表者

北原 寛子 (KITAHARA, Hiroko)  
小樽商科大学・言語センター・客員研究員  
研究者番号：60382016

(2)研究分担者

なし ( )

研究者番号：

(3)連携研究者

なし ( )

研究者番号：

(4)研究協力者

なし ( )